
Desk Letter

〇三一六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e s k L e t t e r

【Nコード】

N 9 0 8 8 C

【作者名】

〇三ー六

【あらすじ】

単位だけのために選択してしまったつまらない授業。いつもの時間つぶしも今日はできず、たまらず途中で帰ろうとしたときに目に入った落書き。そこから始まるメッセージのキャッチボール。見ず知らずのあの人を思いながら・・・

また今日もけだるい授業が始まる。別にやりたい事があるからこの授業を受けている訳ではない。あくまでも単位のためだけにこの授業を選んだだけだ。出席さえすれば単位をもらえるなんて甘い考えがいけなかったと今になって後悔している自分がここにいた。授業がつまらないとは言えども、座席は1番後ろの窓際なのと、うるさくしてさえないなければ寝ていても怒られることはないというのがこの授業の数少ない長所だろう。

初老の教授が淡々と授業を進めているころ、いつも僕は教授の声を子守唄にして睡眠学習に入るのだが、今日はいつもと違ってなかなか眠りにつけない。そのときはずっと街の背景が空の青から茜色に変わり行く様をボーッと眺めているのだが、今日の曇り空を眺めていても面白くもない。

仕方がないので今日は真面目に授業を聞こうと思っても、普段聞いていないせいか、何がなんだかさっぱりわからない。

こんな日は途中でサボるに限ると思った僕は配布されたレジュメをファイルに綴じて帰り支度をすることにした。

レジュメをどけると、机のどこの誰かが書いたのかわからない落書きが目に入る。その落書きはあるキャラクターであったり、くだらないメッセーじであったりと授業が退屈なのは僕以外にもいることがよくわかる。

そして数ある落書きの中のひとつに僕は心惹かれてしまった。どうして惹かれてしまったのか僕にもわからない。ただ「お話ししよう」と女性らしい丸みが帯びたきれいな文字が僕の中の何かを刺激したことは確かだ。

気がつけば僕は帰り支度を済ませたかばんをひとまず机の上から再びいすの横に置いてシャープペンを手に取っていた。

このメッセーじを書いた人はきつと流れるような黒髪の可憐な女

性なのだろうとつまらない想像を脳内に駆け巡らせながら、「僕でなければお話しませんか」と僕は淡い期待とともに無機質なプラスチックの長机にシャープペンを走らせた。だがそれと同時に、冗談交じりのおふざけではないだろうかと言う不安が無かったと言えばそれは嘘になる。

淡い期待と不安とともに気がつけば1週間が経っていた。あいかわらず無機質のプラスチックの長机にはシャープペンの落書き。もちろん僕が心惹かれたあのメッセージも、それに対しての僕の返事も。

見ると、僕のメッセージが矢印が引かれてあり、「私は心理学部の2回生です。よろしくね。あなたは？」というメッセージがあった。もちろん筆跡もあの人のものとすぐに分かった。

学部は違えども2回生といえば僕と同じ年。すぐに僕は「僕は文学部の2回生です。こちらこそよろしく」と直ぐに返事を返した。

それからというもの、僕とあの人のメールとは違うメッセージのやりとりを毎週のように交わす。「あの人は僕のメッセージを見ているのだろうか」という返事を知りたくても知れない不安とどのような返事が来るのかという楽しみは文通に似通ったものがある。

メッセージの内容はこの1週間何が起きたのかを書いてそれについてメッセージを書いて、また日記を書くという繰り返しというような交換日記を机で繰り広げられていた。

やがて机が黒鉛色に染めてしまうと、今度は付箋を机の中に貼り付けてメッセージを交わすようになっていった。付箋になると、あの人のメッセージも女の子らしく色とりどりのペンであしらったメッセージになっていった。そして僕のメッセージも自然とシャープペンだけの殺風景なメッセージから色ボールペンでカラフルに仕上げたメ

ツセージに変わっていた。

時は流れ、前期もそろそろ終わりを告げようとしている。週を重ねる度に、僕のあの人に対する想いも強くなつて来ている。1度会って話をしてみたい。そんな気持ちに僕を支配する。前期の授業の最終の1週前。僕は意を決して「来週の火曜日の夕方、キャンパスの噴水の前で会いませんか？」とシャープペンだけで書いたシンプルな付箋をまたいつものように机の裏に貼り付けた。貼りつけようとすると手が緊張して震えている。心臓の鼓動が体中を伝って細かく僕の体を脈を打つのが分かる。付箋を貼り終えても、家に帰っても、そして1週間経つてもずっと早いテンポで僕の心臓が脈を打ち続けた。

そして前期の最終週。机の裏にはあの人の付箋も、僕の付箋も何も無かった。この時点で僕の恋は終わったと悟ればよかったのだが、この事実を認めたくない思いで僕は授業が終わってから直ぐにキャンパスの噴水へ一直線に向かった。キャンパスには付箋が1枚。それにはこう書いてあった。

「私も会いたいけれど、ごめんなさい。あなたに会うことができません。いままで楽しかったです。ありがとう。」

茜色に染めた空は僕をむなしく照らす。

あの人は誰なのかまったくわからないまま、メッセージはこれを最後に途絶えてしまった。

本当に失恋したのか、それとも幻なのかもすべて分からないまま。

すべては夏の夕暮れに消えた。

（後書き）

はじめまして。

机の落書きを見ていたら、この話がすぐに浮かんできました。

他にも小説っぽい文章を書いたりしているんですけど、恋愛のジャンルは初めてで、あえてチャレンジという意味も込めて初投稿作品は恋愛（？）の短編を書いてみました。

またネタが浮かんだら不定期に小説を書いていくと思いますのでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9088c/>

Desk Letter

2010年12月31日21時58分発行